

- 1 派遣期日 令和元年10月18日(金)
- 2 研修先 会場名 大宮ソシックスティホール・ビル会議室
所在地 埼玉県さいたま市大宮区桜木町1丁目7-5
大会HP <http://fuyou.saitama-u.ac.jp/saitama-k/>

3 研修内容

大会主題：第58回全日本特別支援教育研究連盟全国大会埼玉大会
「志をもち、未来社会を自立的に生きる子供たち」
～一人一人の教育的ニーズに応じる教育の充実を求めて～

本大会は、我が国が批准した障害者の権利に関する条約が効力を生じて5年が経過し、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のため特別支援教育が進展する中、新学習指導要領の全面実施を直前に控えた説目に開催された。2日間の日程であったが、私は2日目のみ研修として参加した。

- (1) 学校見学 Aコース 埼玉県立特別支援学校さいたま桜高等学校(知的障害・高等部単独校)

- (2) 分科会 第13分会 「自閉症の児童生徒への指導」

テーマ：知的障害と自閉症を併せ有する児童生徒への指導

I 実践発表

ア：障害特性を理解した自閉症児の支援と指導

～研修を生かした支援の工夫と個々の課題に応じた自立活動の指導～

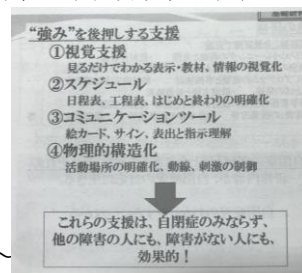
埼玉県立秩父特別支援学校 教諭 宮前 大志先生 磯田 貴之先生

①障害特性の理解と支援の推進

自閉症の障害特性として、①社会性の障害②コミュニケーションの障害③反復的で常同的な興味・行動の3つが挙げられる。自閉症児の指導・支援においては、まず、研修により障害特性を理解し、それらを生かして、自閉症児がわかりやすく生活・学習できるよう環境を整え、指導・支援していくことが必要である。小学部では自閉症教育について、毎年研修会を行っている。障害特性の理解、特性に応じた指導方法、実践事例研修、資料配付等を行い、共通理解を深めることで実践に活かせることも多くなった。自閉症の得意なことを生かし、強みを後押しする支援として、視覚的な支援、学習環境の物理的構造化、コミュニケーションカードの活用、スケジュールの掲示等が、いずれの学年においても積極的に行われるようになってきた。それに伴い、わかりやすい支援の中で、子供たちが安心して学習に取り組むことができるようになり、落ち着いて学習に取り組める場面も多くなってきた。

②個々の課題に応じた自立活動の実践

小学部から高等部までの全ての児童生徒に対して、個々の課題に応じた自立活動の学習を実践している。個々の課題を見極め、計画的に指導に当たれるよう、「自立活動の指導計画」を作成・活用している。また、専門的な視点で授業に当たれるよう、担任外である「自立活動部」との協力体制、新転任教員の授業力向上に向けた研修等も、自立活動の授業を支えるシステムとなっている。個別設定での学習ができる自立活動で、自閉症児については、個々の課題や興味に合った学習を行うことで、学習に対する意欲や学習態勢が身に付き、集団場面でも学習に参加できるようになった。



イ：体育における知的障害と自閉症を併せ有する児童への指導

～前転・後転につながる感覚を育てる指導を通して～

千葉県旭市立中央小学校 教諭 宮内 弘和先生

特別支援学級に在籍する児童の中には、運動に消極的なために人間関係が限定されたり、肥満傾向になったりする児童がいる。そのため、体育の授業を充実させ、運動に親しむ児童の育成をすることが課題になっている。特にマット運動は、非日常の動きが多く児童にとって感覚がつかみにくい内容の一つである。児童の実態を踏まえ、前転と後転につながる感覚を育てたいと考えたため日常生活で培うことの難しい「腕支持感覚」と「逆さ感覚」を育てるための指導を行った。

①サーキットトレーニングの実施

主運動に取り組む前に、児童が慣れ親しんでいるサーキットに「うさぎ跳び」「馬歩き」「逆さ姿勢」「斜面ゆりかご」の4つの補助運動を取り入れ、楽しく「腕支持感覚」と「逆さ感覚」を味わえるようにした。また、サーキットを行う際は、児童の好きな音楽を流し、1回の授業毎に4分間を2回行った。

②一人一人の課題に応じた主運動の設定

一人に一つずつ取り組む場所を用意し、それぞれに必要な感覚を育てるための場とした。また、それぞれの課題では、意欲化につながる目標物の設定を行った。A児が主に行った「手押し車」では、触れると好きなキャラクターが映し出されて効果音が出るタブレットパソコンをゴールに設定し、B児が主に行った「ゆりかご遊び」では、体を丸めて足で触れると鈴が鳴るボールを使用した。基礎感覚で「腕支持感覚」と「逆さ感覚」を重視した指導を行ったことで、2人の児童は、逆さ姿勢を怖がることがなくなり、前転・後転が「できた」という成就感や「できそう」と見通しをもたせることができた。さらに技の成功率や完成度を高める観点からはまだまだ指導が必要であるが、そのためには更なる授業時数が必要となる。一人一人の教育的ニーズの中で優先順位をはっきりさせて、指導計画の再構していく必要がある。

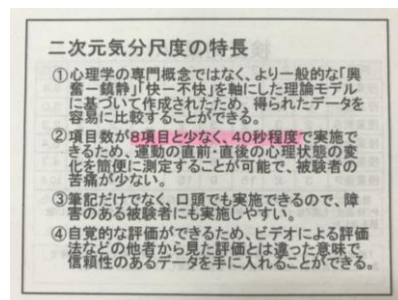
II 研究協議

○自閉症の特性を生かした指導・支援の工夫

○一人一人のニーズに応じた個別の指導計画の作成

III 助言指導 東京都立品川特別支援学校 校長 杉本 順先生

淑徳大学総合福祉部 教授 加藤 哲先生



4 感想

学校見学では、高等部で将来の社会生活・職業生活のために、生産技術科、家政技術科、工業技術科、環境・サービス科と4つの科に分かれて活動しており、生徒が真剣に授業に取り組む姿が見られた。

分科会では、2つの実践発表をもとに協議を行った。特別支援学校の取り組みでは、研修で障害の特性を理解した上で視覚的支援・学習環境の調整などの取り組みの紹介があり、すぐに活用したい。また、担任外の自立活動部が計画的に授業構成をしていることは大変魅力的である。本校は在籍児以外に特別な配慮が必要な児童が多く、コーディネーターとして研修の必要性を強く感じている。自閉症の弱みを強みにすることで自立に向けて効果的支援をする方法を全職員で共有していきたい。体育における実践では、学校行事の中でも体育的行事が多いことで、自信をもって生活するために体育の授業から共同および交流ができるように考えて実践していることはとても大切であると感じた。児童の変容を技能面だけでなく、「二次元気分尺度」を活用して情意面からも評価することで自己肯定感を高めて、休み時間など生活面でも結果が表れていたことは参考になった。全国大会ということで、各都道府県の特別支援教育の動向も知ることができ、新たな発見もあって、大変勉強になった。今後の実践に生かしたい。